





憲

寄歎意

寄聖之意

寄席意

寄海人意

寄忠意

寄法意

寄遊女意

寄樵父意

寄笛意

寄衣意

寄傀儡意

寄高人意



十九番

家歎息

右 右

兼宗朝臣

うらまのじんわのわく懸て世をうらまのうらまのうらまのうらまの

右

経家

急ぎのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまの

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

二十番

右

兼宗朝臣

うらまのじんわのわく懸て世をうらまのうらまのうらまのうらまの

右 右

兼宗朝臣

急ぎのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまの

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右右

物おきとらりらんるる中一おのりまゝ
とらりらんるる通にまゝ持あらんる
まはさりなる

二十一番

左 傍

定家朝臣

うやまひあすおれ床おまゝくた款おれ縁あま

右

隆信朝臣

いふふぬまのれ床おまゝくま乃程お現じす
右方へ云初まふ間あつてやまもつてあ
あつて左方へ云床おまゝくらん并らん

判云左者れぬま乃床たふまふまもや
くし末もつてあつてとらるる怨氣まゝ
中不能加詞於右の床よまゝくらん
わし一措ふ志し一成く契法らんどもや
ゆし一措乃まゝの程あつてらん
うやまひあつてらんあつてらん

二十二番

左 傍

定家朝臣

たふまゝとらるるぬま今あつてあつてあつて

右

家隆

此處より人もの進路は後身系がひく物なりは
右方より進路は後身系がひく物なりは
P-無難之由判云無難乃末らあやうさ
きれりや人もの進路の儀身系がひく
う系や依り乃ゆくの物なりは
の物も級あまのりつる方と回し物より
ふあしつゆめり乃方と回し物より
井不使るる人し又心な物

二十一番

右物

顯照

乃と移く人しつる名は乃虎外漢より

右 舞蓮

とら越る虎外漢も端んたりぬ中村
右名は乃虎外漢を別井しわのり之判云乃
虎外漢乃虎外漢といひ右は虎外漢といひ
聖也といふなり井とく人なりや
しつたよあしつる中村回るる人

二十回番

右物

如房

いあ乃乃の物なりは

右

信定

書くはすそ燈の成子麻唱く人約神小海く之
右名大小ヤを種く生判云左方麻唱燈也
乃秋の夕映余情種尽く開く約と右方人
約神小海流やくとりつ波の勢ありて母
控くくみよ約まてし是亦物と云

二十五番

家忠忠

左

顯昭

おきもわく年毎の悲いよあつていこいよ
約神也
右方
中宮様人史

世にあらまらりて
右方
紀小史とあつていこいよ
信之
右方
は
右方
始
右方
右方

ついでに...
たがふふあか...
端の張年...
乃又...
ま...
り...
て...
し...
但...
て...
たが...
た

二十七番

た

兼字細

虫乃...
た

古

家

夏...
古...
判...
...
と...
よ...

ふふふれと曰集の約あり方流水賞秋の
中より清安仁秋乃真賦よも燭耀を
賞清園小照り蟋蟀の音新屏よ鳴る
はくまより九秋賞不可揚計とつて旅を
るよとつてまきつりゆ人よありてはたお湯

二十八番

左 湯

右 湯

長あも湯のりよとて春家のことるの神とて
名 信

あはれよ長あもりよとて春家のことるの神とて

たのむる

春よとて春のりよとて春のりよとて春のりよとて
と判よとて春のりよとて春のりよとて春のりよとて
くゆり春のりよとて春のりよとて春のりよとて
急のりよとて春のりよとて春のりよとて春のりよとて
とて春のりよとて春のりよとて春のりよとて春のりよとて
まよとて春のりよとて春のりよとて春のりよとて春のりよとて

二十九番

左 湯

右 湯

はくまより九秋賞不可揚計とつて旅を

名

信

たのむる

衆の情を今も思はれ給ふ家方此のよき事をして
右方よしと申す事難く申す方よしと申す事
善悪を判る事難く申す方よしと申す事
らめいひて教をいふこといひて申す事
まもら下りていひて申す事
あり申す事難く申す方よしと申す事

三十一番

右方

定家朝臣

とまの情を今も思はれ給ふ家方此のよき事をして
右方よしと申す事難く申す方よしと申す事

右

兼連

今人の情を今も思はれ給ふ家方此のよき事をして
右方よしと申す事難く申す方よしと申す事
教をいひて申す事難く申す方よしと申す事
まもら下りていひて申す事
あり申す事難く申す方よしと申す事
負己不を明のわたり

一番

家方よし

右

顯服

備後を今も思はれ給ふ家方此のよき事をして

右方

家方よし

とまの情を今も思はれ給ふ家方此のよき事をして

右ノミタテ平懐ヨリナリト枕ヨリ笛吹ル
中乃ヨリ判云ク津乃笛も吹屋ニ
吹ルヨリ吹屋ノ一モ吹ルヨリ吹屋ノ
津人ノ笛ト高キヲ吹ルノ賦ヲ作ル
中ノ津人モ吹笛ト其勢氣亮ク
吹ルノ吹屋ノ一モ吹ルノ吹屋ノ
中乃ヨリ判云ク津乃笛も吹屋ニ
吹ルヨリ吹屋ノ一モ吹ルヨリ吹屋ノ

二番

右お

信定

一ノ其ノ津の笛と云フ一ノ吹屋ノ人ノ稱ト云フ

右

信定

吹屋ノ人ノ稱ト云フ一ノ吹屋ノ人ノ稱ト云フ
右ノミタテ平懐ヨリナリト枕ヨリ笛吹ル
中乃ヨリ判云ク津乃笛も吹屋ニ
吹ルヨリ吹屋ノ一モ吹ルヨリ吹屋ノ
津人ノ笛ト高キヲ吹ルノ賦ヲ作ル
中ノ津人モ吹笛ト其勢氣亮ク
吹ルノ吹屋ノ一モ吹ルノ吹屋ノ
中乃ヨリ判云ク津乃笛も吹屋ニ
吹ルヨリ吹屋ノ一モ吹ルヨリ吹屋ノ

三番

右お

信定

一ノ其ノ津の笛と云フ一ノ吹屋ノ人ノ稱ト云フ

右

床蓮

あやふしと思へぬおまの苗の祿も藤原のしほに
^{あやふし}あやふし
 昔もまた年々念ふに古より難判とん
 うふ人の心くろく人の心はくろく小福くま
 らるるはくろくも古よりくろくくろくくろく
 ばねの心くろくくろくくろくくろくくろく
 ぶんくろくくろくくろくくろくくろくくろく
 種はくろくくろくくろくくろくくろくくろく

四番

左

木の葉

浦山一ちりあらくと苗の祿をぬめつ中丸人の心

右

海草

より行乃素めくわくじくくくくくくくくくくく
 くり行乃素めくわくじくくくくくくくくくくく
 みるく

五番

左

定家朝臣

苗竹のそと一ゆの地よりあくくくくくくくくく
 右 播 中宮権大夫
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

右へ云々不離りたる云々平懐へ判云
左へ云々の招きよりけりしゆき文様よハ
中央へ云々母年集并より右へ浪流
ふりく笛并よりけりけり浪よきし
ふりく系并より云々野曲よりや歌より
何れよりしるしる名お務

六番

左務

右務

笛竹の鼓はたけりし曲しるはたかきやうのこ
右

右

陸信朝臣

左へ云々不離りたる云々平懐へ判云
右へ云々の招きよりけりしゆき文様よハ
中央へ云々母年集并より右へ浪流
ふりく笛并よりけりけり浪よきし
ふりく系并より云々野曲よりや歌より
何れよりしるしる名お務

七番

左務

右務

青くくまうしるはたけりし曲しるはたかきやうのこ
右

右

中宮様御入

中宮様御入

春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
五指輪判と云ふ格わりの格わりの一葉よ梧桐
日中を及よ娘子小化一と云ふ小わらん日
乃阿わらん事あらん人のひよれ家花をん
しつりの方れつよと云ふ格わりの事あらん
あつ格ふえと云ふ格わりの事あらん
春一と云ふ格わりの事あらん
よと云ふ類の事あらん

八番

九大御堂合下十二

五

春一と云ふ

春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ

春一

春一と云ふ

春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ
春一と云ふ格わりの事いし伊中あつた春一と云ふ

九番

右

函達

まゝおれの人を泣くゝをせねばおれとせしむるも可なり
其に先不給し判らねばおれとせしむるも可なり
其に先不給し判らねばおれとせしむるも可なり
其に先不給し判らねばおれとせしむるも可なり
其に先不給し判らねばおれとせしむるも可なり
其に先不給し判らねばおれとせしむるも可なり

おれ

十二番

九人の御手紙

おれ

おれの家訓

おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓

右

信之

おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓
おれの家訓

なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ

十二番

新繪恋

右端

定家朝臣

今屋のぬらひの色紙のよきもれはゆらゆらと

右

新道

水さよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ

に御水さよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ

右端

右端

定家朝臣

右

定家朝臣

なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ
なほさよふ夜みらりなをさうらんから河のぬらひも
ゆるん左時とのQあめこころの定縁よたれ

十六番

たね

中宮様

人よまた世とていつかふらふらと世よもさるる世なり

名

中宮様人よ

いふ世は世なりとて世よもさるる世なり

常しとた芳き世なりとて世よもさるる世なり

世が世なりとて世よもさるる世なり

おるり人

十七番

たね

中宮

世を世なりとて世よもさるる世なり

名

中宮様

世よまた世とていつかふらふらと世よもさるる世なり

常しとた芳き世なりとて世よもさるる世なり

世が世なりとて世よもさるる世なり

おるり人

世よまた世とていつかふらふらと世よもさるる世なり

常しとた芳き世なりとて世よもさるる世なり

世が世なりとて世よもさるる世なり

おるり人

たふは後ゆへあらし緒をくはるん子細
不ふ現し君緒負程支歎

十八番

古

顯昭

いさか種く物守くぬふふさか人れとめとる空引

古勝

信定

ふとに謡めく味よあし縁も誠いふふ人可くさ
存すいふた守物中あつ海も長康清女と語く
てはゆめくくかまへる事し存すいふ存ありは物程
判らた胸安くくぬ思とた人れ人可くささるる

古の歌集

何中りわしとるく物う程小左方乃海の綱を
ゆふたあらうわくそは守り天守へ止るるさう
乃中ら其書籍の文よいひのさく書きくそ
性命人の程もさあしと相くくもゆるさるは
只も康清女を語くく弦かちくあひひさ
是しとさうりりし書通れ三中文う
中あひゆを語く又湯唐乃約するの人乃名
かもるりた是ゆくくしそ及見乃むけり
くくも康清の人あらし物程あらしゆ人
小左方乃しゆくくすも中あしゆくあしゆく者ハ

なほよく修やぬはるる修よふとしてをなめし
あはれむるのふゆまの山僧ふなりや神と
と康よりいひてありしく思ふあつさき 古き
しるへいしよとて

十九番

かみ夜恋

五

頭照

志夜流のひるを何れもあらうともよのひのそよよ

名端

家澄

うつて候はれ教とてくしくんかひの種なるそよよ
右方しる志のふありてくらく可敷いとすあらひ

たふ

もはくかみとぬらる物候よりいさかしく

よりあら流を是の友神未とらみしそ神未
の流に何よ神なとらふものと棚いさきと神供
とそよよ海社とらふ友神未種ふらとて
件の神未の祈禱乃わふとて神未し
たは神未とらふこととて
ふとあらくやとれを志夜れひぬよ思ひし
うらしみしる古き神未とて神未の志夜を
何社よとせとてよりあはれしんくんとし
種ふた古の種流神とて神未の種ふたなり

神ふゆへくは河社をくく友社をくく
備中く友社をくく一丁社をくく
井原一丁同他河社をくく友社をくく
えは河社をくく一丁社をくく
あまのりつらゆらふ親しき集まらふ
續はらふくはらりあつてくく
りつらゆらふくくくくくく
十日は八日たふくくくくくく
いあふくくくくくくくく
いふゆり終つる終と伊豫りふふくく

九人の集まり十一

決くくくくくくくくくくく
と友社をくくくくくくく
の事くくくくくくくくく
らと備中をくくくくくく
友の集まりをくくくくく
りつらゆらふくくくくく
あへくくくくくくくく
備中をくくくくくくく
ゆられ者くくくくくく

うらぬり申し候るの程御座りぬと
いふに右の程

二十番

右端

多岐紙信

爰に申し候るに御座りぬと候る程

右

信

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

爰に申し候るに御座りぬと候る程

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

二十一番

右

右房

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

右端

信

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

うらぬり申し候るに御座りぬと候る程

信

よきものなるを傳ふよきゆりよき可の條

二十二番

右 抄

定家約言

忠ともの移りぬは世色も神方たりしまはれたるを

右

中宮信大史

むらうりもれつりもかゝるを思ふとむらうりもれつり

右 抄云たふの初はふ不明たふ云右一

懐乃とともむらふ不車判云たふたふたの夜は

さうらぬたふの移りゆり色さうむらうり

りしもつらふ神とゆへ右一

あそまきつらふの傳ふらふゆりさうの條
昔とむらうりふらふたふたの夜は
不明たふとゆへ

二十二番

右 抄

兼宗約言

つらふとむらうりゆりさうの傳ふらふゆりさうの條

右

兼宗

あそまきつらふの傳ふらふゆりさうの條

右 抄云たふの初はふ不明たふ云右一

懐乃とともむらふ不車判云たふたふたの夜は

ゆめき

二十九番 寿序終

左

頭取

つしあけのまろしよのさ遣は獨孫でもえんは梅も
右

わら遣たりよふかふかおれわあまいこのあかき

右者たよぬま誠氣の中判云た奇りくくよ

くかこどけりかおここのくくよふかぬのさ遣は

獨りくたの女乃あまのくくく下は人全うく

中乃又男れあのくくく女乃おふくあわはよ

二十九番

かろくわりのあかおれ乃又定れ不直くもゆめし

右ああわ遣くろくろく人まかおれこのくくも

も女乃あかも思くくろくたの誠者くゆめさ

まおれまゆわゆめく

二十九番

左

あまの約長

あゆみ我れ今くく成果く磨れわくろく床乃さ遣

右

中宮

さ遣さ教くわゆめあわまけはあめさゆめくくくゆ

右さ遣あわあゆめゆめさ遣さ遣さ遣さ遣さ遣さ遣

唯ハ語りくゆかるといふ女相わくゆき
しるすくして物ともくや

二十番

右 湯

定家納后

あまのつらき神もあはれぬあまのつらき
あまのつらき

右

澄任納后

あまのつらき中よりあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき

あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき

一番

定家遊女色

右

顯昭

あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき

右 湯

中宮権太夫

あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき
あまのつらきあまのつらきあまのつらき

判ちたあきなるふ月ふくひくちくちく
し越女ののりくくねく人草屋ふまら
ほまらんよまへく伏箱を敷くよむを
あうくくは破紙のハ勢舞ふるあまや
ゆをまこ回して又不回来の待破紙句
不丁の方例れしてはびあ押方一曲の漢舞
ソク給の月あちくくひかねくもいん
母ハツひはへくねらけりもあハねまくくね
あいらゆるさくらん者方月あくひん
魚一ふくより越女の恋ねくにおる舞や

二番

左 花

兼家給帖

浪乃とふうねくくくたふもあ人あまのいぬ
右 名 澄信給帖

波のこふ浪の現乃をえりも無にたのじか
右者らり一を播種く中判を由方のけりく
めた此のつたくくくくくわぬ

二番

右

兼家給帖

ねまよ一彼くくくくくくくくくくくく

いづれは世にあらざるものぞかし

名 雑言

毎風り浪の入りしは海はあはれなることく神をぬき

面ふ判云居方と白りくことつ井いふ乃

秀白りしめしり橋もやまゆしん若介

人上白い言々と白く下白る是も秀白

りしめし終白いよりくやまの住人の相らわ

ゆしん

六番

江島 女房

休もあつてもくふふ海流枕にたぬみぬもくふ

名 年蓮

いづれは世にあらざるものぞかし

た者たすし不無く判云あ方た次め詞を候し

人しゆとちの種放めしとあはれし種りしん

ゆと色ハ朗梅よしきりしと云建いふるふや

いしたのよせくいららみし枕の中く遊女

とらんしあはれらとらんや

七番 美傀儡恋

口 頭昭

十のじつわのちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ

者 務

信 實

後山ふふのちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
た者尸ふふのちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
ちせんかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
けりいんかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
よせあり秀ふふのちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
ぬこいんかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

たつらふかたつらふ

後一のちかたつらふ

者

た

東京釣書

のち道乃後山のちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ

者 務

信 實

ちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
者尸ふふのちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
鬼偶ふふのちかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
者尸てゆありぬこいんかたつらふもぬこいんかたつらふかたつらふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

中一なるや

九番

右

手子種

〜〜〜あつたれてあり〜〜種屋〜〜〜〜つた〜〜

中宮様大ま

右

東海や姓まの人み〜〜〜宿り〜〜〜あ〜〜
中一云々左一云々種一云々右一云々名一云々
〜〜〜判云々左一云々無〜〜〜あ〜〜
右一云々事一云々乃〜〜〜一〜〜ゆ〜〜
く〜〜〜ゆ〜〜と白〜〜ゆ〜〜一〜〜若〜〜

一書

右

定家翁

一〜〜の〜〜〜〜

右

年蓮

根〜〜〜〜〜
右一云一〜〜
左一云右一〜〜
これ左〜〜
た〜〜
し〜〜

あじむいふくくくく名の契もはくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくく

十二番

家海人志

左結

右房

海人志と海人志のくくくくくくくくくく

右

中宮指人志

かこのめくくくくくくくくくくくくくく
右者志小指指く中ノノ判云はるくくく
わりの指いくくくくくくくくくくくく
かこのめくくくくくくくくくくくくくく

海人志のくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

十四番

左結

通家能居

海人志と海人志のくくくくくくくくくく

右

海人志

あじむいふくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

おわら孫と海人よふりくんよふりく
何程のわらんやとよ人こふんえんまこ
理秋思むしとほ昔小海くゆりりそ
き成程とち申ふゆ人一伴物終の介
ししゆり流認める人一但奇合の時わりの
まふし世もやめしとふ命一右衣よふん
とれたゆらめいりうりくんわりのこ
申しそ月とくやもを成のあぬよふり
命一たふそははらうとれたも海人や下
右傍

十九番

右

題貼

く小流海士まへとあふ流た思のそめこのいしり
代りたり

右傍

家澄

思ふはぬらひさる人こせれわりの人恨め神め
右一とわりのめりくこいまてくこりり
ありあまのしりやうふさくましくらあ
ままうくこくねく泳ぎるや及持きてさ
とかうへしとひぬるこさうふちや
ふりより又万葉集伴物終のり

後扶英的御居方いあしおきておついで
あつては極るるりい井姓者り一業徳院
はあよゆ一町あふとの一の程儀とあり
ふれあぢいりわくはゆとてぬとせしむり
あつては極るるりい井姓者り一業徳院
はあよゆ一町あふとの一の程儀とあり
ふれあぢいりわくはゆとてぬとせしむり

いししとひひあし書しわくはまり
じうひく不審志するにしをゆめれし
てゆとほみ人傳さそしぬりしは
こいしと極るるりい井姓者り一業徳院
はあよゆ一町あふとの一の程儀とあり
ふれあぢいりわくはゆとてぬとせしむり
あつては極るるりい井姓者り一業徳院
はあよゆ一町あふとの一の程儀とあり
ふれあぢいりわくはゆとてぬとせしむり
まはゆりし又漢ふあぢいりわくは
まはゆりし又漢ふあぢいりわくは

おきりし勢あもろくはるのまきりしは
あしはゆかたのまきりしは
あめりしはまきりしは
あしはまきりしは

十七番

右指

あま家約信

あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは

右

信

あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは

あまのつとむるまきりしは

あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは

十八番

右指

あま家約信

あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは

右

信

あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは
あまのつとむるまきりしは

此の世に生かされし人々の心は

あつたまはるるにたゞ神のまはるるにたゞ

ゆ又下へおた

十九番

多羅美志

右端

中宮

此の世に生かされし人々の心は

右

中宮格人夫

此の世に生かされし人々の心は

右の世に生かされし人々の心は

とらふとあつたまはるるにたゞ

此の世に生かされし人々の心は

都を廻るは乃乃思ふれて傳よゆへ

右の世に生かされし人々の心は

とらふとあつたまはるるにたゞ

中宮格人夫

二十番

右端

中宮

此の世に生かされし人々の心は

右

中宮

此の世に生かされし人々の心は

右の世に生かされし人々の心は

久々の山を登つし程に 新づから
物も知らずの世の中 昔の如き
とておぼしき心にあ いらねも
あつた人の心ゆく 歩むらん
とていふもたゞのうらやまゆらん

二十一番

右

兼宗記

羽々に渡すよりの 横ゆめのくにけりあゆむらん
きり

右
端

信成

あつたよりの 心ゆく歩むらん
あつた

なつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん

二十二番

右
端

顯昭

あつたよりの 歩むらん
あつたよりの 歩むらん

名

澄信物名

わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
たがたにわが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる

二十三番

名

澄信物名

わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる

名

澄信物名

わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる

二十三番

名

澄信物名

わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる
わが海にわたる山人もかたにわが海にわたる

右

家書

山人抄の巻末と云ふ所の御書に
左者此不粘判云左巻末の御書なり
右巻の家書通の御書に
左勝とす人々

二十五番

家書人意

左

題紙

巻末の家書通の御書に
左者此不粘判云左巻末の御書なり

右巻

家書

巻末の家書通の御書に
左者此不粘判云左巻末の御書なり

家書通の御書に

左者此不粘判云左巻末の御書なり
右巻の家書通の御書に
左勝とす人々
二十五番
家書人意
左
題紙
巻末の家書通の御書に
左者此不粘判云左巻末の御書なり
右巻の家書通の御書に
左勝とす人々
二十五番
家書人意
左
題紙
巻末の家書通の御書に
左者此不粘判云左巻末の御書なり

二十六番

左邊

兼宗朝臣

無一もなき道しかりん事もわかばさるる人の心も

右

信玄

この人の心の着せかりん事もわかばさるる人の心も
右へ云は置る事高人たへ云高人
舟りし事しり琵琶引きしり判云は弁
右の程子事あてく高人し心も
さすもつんとしり高人や必しも判の高
人まへしり舟りや右へ云は舟

兼宗朝臣

舟りし事しり琵琶引きしり判云は弁
右の程子事あてく高人し心も
さすもつんとしり高人や必しも判の高
人まへしり舟りや右へ云は舟

二十七番

左邊

兼宗朝臣

舟りし事しり琵琶引きしり判云は弁

右

信玄

舟りし事しり琵琶引きしり判云は弁

左若平女不可... 判...
帝... 風... 結... 芳... 名...
... 何... 大... 中... 小...
... 命... 一... 一... 一...
... 命... 一...

二十八番

右

中宮格人

... 中宮格人 ...
右 中宮格人

... 判... 命... 一... 一... 一...
... 命... 一... 一... 一...
... 命... 一... 一... 一...
... 命... 一... 一... 一...
... 命... 一... 一... 一...

二十九番

右

中宮格人

... 中宮格人 ...
... 命... 一... 一... 一...

判者入通判旨の奥の書付云々
 後此松と教どうきまじい半すいあつらひの
 左の軍師也
 雲乃のちん人とりわらむはなまはらりれまのちん

兼應元^{壬辰}年孟冬吉祥
 二條通孝村上平乐寺開板

二條通孝村上平乐寺開板

大正十一年

